

その方の名はイエス

著者	佐々木 哲夫
雑誌名	大学礼拝説教集
号	4
ページ	17-26
発行年	2000-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1204/00024630/

「その方の名はイエス」

宗教部長 佐々木 哲 夫

イザヤ書、第五章一―十二節

¹ わたしたちの聞いたことを、誰が信じえようか。

主は御腕の力を誰に示されたことがあろうか。

² 乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のように

この人は主の前に育った。

見るべき面影はなく

輝かしい風格も、好ましい容姿もない。

³ 彼は輕蔑され、人々に見捨てられ

多くの痛みを負い、病を知っている。

彼はわたしたちに顔を隠し

わたしたちは彼を輕蔑し、無視していた。

⁴ 彼が担ったのはわたしたちの病

彼が負つたのはわたしたちの痛みであつたのに

わたしたちは思つていた

神の手にかかり、打たれたから

彼は苦しんでいるのだ、と。

5 彼が刺し貫かれたのは

わたしたちの背きのためであり

彼が打ち碎かれたのは

わたしたちの咎のためであつた。

彼の受けた懲らしめによつて

わたしたちに平和が与えられ

彼の受けた傷によつて、わたしたちはいやされた。

6 わたしたちは羊の群れ

道を誤り、それぞれの方角に向かつて行つた。

そのわたしたちの罪をすべて

主は彼に負わせられた。

7 苦役を課せられて、かがみ込み

彼は口を開かなかった。

屠り場に引かれる小羊のように

毛を切る者の前に物を言わない羊のように

彼は口を開かなかった。

8 捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。

彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか

わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり

命ある者の地から断たれたことを。

9 彼は不法を働かず

その口に偽りもなかったのに

その墓は神に逆らう者と共にされ

富める者と共に葬られた。

10 病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ

彼は自らを償いの献げ物とした。

彼は、子孫が末永く続くのを見る。

主の望まれることは

彼の手によつて成し遂げられる。

¹¹彼は自らの苦しみの実りを見

それを知つて満足する。

わたしの僕は、多くの人が正しい者とされるために

彼らの罪を自ら負つた。

¹²それゆえ、わたしは多くの人を彼の取り分とし

彼は戦利品としておびただしい人を受ける。

彼が自らをなげうち、死んで

罪人のひとりに数えられたからだ。

多くの人の過ちを担い

背いた者のために執り成しをしたのは

この人であつた。

ルカによる福音書、第一章二六―三八節

²⁶六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。

²⁷ダ

ビデ家のヨセフという人のいいなすけであるおとめのところに遣わされたのである。そのおとめの名はマリヤといった。²⁸ 天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」²⁹ マリヤはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。³⁰ すると、天使は言った。「マリヤ、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。³¹ あなたは身ごもつて男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。³² その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。」³⁴ マリヤは天使に言った。「どうして、そのようなことがありえますようか。わたしは男の人を知りませんのに。」³⁵ 天使は答えた。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。³⁶ あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。³⁷ 神にできないことは何一つない。」³⁸ マリヤは言った。「わたしは主のはしめのためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」そこで、天使は去って行った。

時を遡ること二〇〇年ほど昔、一人の男が旅をしていました。男は、エチオピアの女王カンダケに仕え、その財産の管理を委ねられていた宦官でした。恐らく女王の側近の一人、身分の高い役

人であつたと思われまゝ。信仰深い彼は、数日間の暇をもらひ、エルサレムへ巡礼の旅に出ていたのです。エルサレム神殿での礼拝を終え、巡礼の帰り道、エルサレムから南西の町ガザへ下る道を馬車に揺られながらの旅をしていました。丁度、見るべき景色もない寂しい道にさしかかり、彼は本を読む事にしました。エルサレムで手に入れたのでしょうか、旧約聖書です。手に取った写本は、預言者イザヤの巻でした。開いた箇所にかう書いてありました。

彼は、羊のように屠り場に引かれて行つた。毛を刈る者の前で黙している小羊のように、口を開かない。卑しめられて、その裁きも行われなかつた。だが、その子孫について語れるだろう。彼の命は地上から取り去られるからだ。

(使徒言行録、第八章三十二―三十三節)

この旅人の男の話は、イエス・キリストが死んだすぐ後の出来事として、使徒言行録に記録されている話です。エチオピアの宦官が馬車に揺られながら開いたイザヤ書の箇所は、今日、「苦難の僕の歌」として知られている四つの歌の最後の一つ、先程、読みましたイザヤ書五三章七―八節の箇所でした。しかし、エチオピアの宦官は、イザヤの記したこの苦しむ人物が、イザヤ自身の事なのか、それとも誰か別の人の事なのか理解できなかったとも記されています。恐らく当時のユダヤ

の人々も、イザヤの告げるこの苦難の僕が誰を意味しているか理解できなかったことでありましよう。それほどに、イザヤの告げる苦難の僕の姿は、人々が期待していた救い主（メシア）の姿と、かけ離れていた描写だったのです。

このエチオピアの宦官の出来事の前、さらに時を遡ること三十三年前、ナザレの町に天使ガブリエルが神から遣わされました。ヨセフのいいなずけであるおとめマリアの所に遣わされたのです。いわゆる受胎告知の場面です。

天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。」

天使は、子供の名前がイエスであると告げます。イエスという名前は、「主は救い」の意味を持つヘブル名ヨシユアがギリシャ語化したものです。ユダヤ人の間では普通の名前でした。主の使いが名前を告げることも、旧約聖書に幾つか記されている出来事です。

イエスという名前も、受胎告知という出来事も、特別に論ずる必要のない程、普通の出来事でした。しかし、特別なのは、イエスの名前に付けられた「いと高き方の子」「父ダビデの王座」「永遠にヤコブの家を治める」という言葉でした。当時のユダヤの人たちは、これらの言葉が旧約聖書と関連していることをすぐに理解出来ました。なぜなら、家庭での祈りの時や、会堂での礼拝の時に、神がヤコブやダビデに永遠の契約を与えたことを学んでいたからです。人々は、この永遠の契約が、救い主（メシア）によって成就されると期待していました。人々は、イエスの誕生にメシヤの姿を期待したのです。

問題は、救い主・メシアとは、具体的に何をする方かと言うことです。人々は、メシアに対し、ローマ帝国の植民地支配を打ち破る革命家、イスラエルを独立させる政治的指導者の到来を期待していました。力強い政治的指導者としてのメシアを期待していたのです。ですから、イザヤの預言した苦難の僕のと、人々の期待していたメシアの姿とは、かなりかけ離れていたのです。

預言者は、しばしば、一つの画面の中に二つの景色を見ます。いわゆる、預言の二重眺望（double fulfillment）と呼ばれる景色です。望遠鏡で見るとき、近い景色と遠い景色が同時に見えます。同じように、イザヤは、男の子の誕生に関し近い景色と遠い景色を同時に見ました。近い景色の男の子の誕生について、イザヤは、はっきりと理解することができました。イザヤと女預言者との間に、

男の子、マヘル・シャラル・ハシュ・バズがやがて生まれるからです。しかし、遠い景色については理解できませんでした。確かに男の子が生まれる。しかも、その姿は、苦難の僕なのです。預言者イザヤは、理解できませんでした。しかし、預言者は、見た通り、苦難の僕の姿を語り伝えたのです。

この苦難の僕の姿は、八〇〇年後、イエス・キリストにおいて具体的に示されました。苦難の僕の歌の最後の部分に次のような言葉が記されています。

多くの人の過ちを担い

背いた者のために執り成しをしたのは

この人であった。

この言葉は、いみじくも、イエス・キリストの誕生から十字架の死、そして、復活に至るまでの生涯を、一言で表現しています。天使は「その子をイエスと名付けなさい」と命じました。イエス・キリストは、人々の期待と異なる苦難の僕の姿でしたが、確かに、救い主として到来したのです。

イエス・キリストの誕生の出来事から二〇〇〇年後の今日、我々は、イエス・キリストの姿に何

を見るでしょうか。何を期待するのでしょうか。イザヤのように、ぼんやりとしたイエスの姿を遠くに見るのでしょうか。受胎告知の記事を読む当時のユダヤの人々のように、この世にユートピアを実現する革命家の雄姿を期待するのでしょうか。イエス・キリストは、実に、「十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってください」(Ⅰペテロ二・二四)と記されている通り本質的な救いを実現された方です。使徒パウロは、それを福音と呼びました。

このイエス・キリストの福音は、東北学院が、一三年前の建学の時に土台にしたものですし、一三年の歴史の中で継承されてきた教育理念の根本でもあります。改めて、イエスと名付けられた方を見上げつつ、教育機関としての東北学院に与えられた道を共に歩みたいと思います。